

令和 7 年度 順天堂大学数理・データサイエンス・AI 教育プログラム 点検・評価結果
(令和 8 年 7 月 3 日、数理科学教育点検・評価委員会)

点検・評価項目	点検結果（コメント等）	評価
A：履修状況 ・履修者数・履修率、目標の達成状況 ・学生の履修を高めるための取組 ・学生の学修成果の把握	● 令和 7 年度プログラムの新規履修者は 2,129 名となり、前年度の 1,937 名から増加した。また、修了者は 1,941 名となり、前年度の 1,607 名から増加している。新規履修者に対する修了率は、令和 7 年度で 91%となっており、令和 6 年度の 83%と比較しても高い水準にあると評価できる。 これにより、本学全体の履修者数は、プログラムを開始した令和 4 年度からの累計で 7,560 名、修了者数は 5,492 名となり、学生総数に対する割合はそれぞれ 93%、73%となった。 ● 令和 7 年度時点で本学プログラムは 9 学部 20 科目で構成され、多くの学部において対象科目を必修に位置づけている。全体のうち 6 科目が選択または選択必修科目となっており、新入生ガイダンスなどにおけるプログラム紹介や強力な履修指導・促進により、選択科目のある学部においても高い履修率を確保している。 ● 本学プログラムが文部科学省の認定制度（リテラシーレベル）に選定されたことを受けて、令和 4~6 年度に引き続き、令和 7 年度もプログラム修了者に対して修了証を交付している。修了証の交付は学修成果の可視化につながり、学生の履修意欲を更に高めるものと期待される。 ● 修了証については、修了者全員に対して PDF 媒体で交付を行っているほか、希望者にはデジタル媒体（オープンバッジ）による交付も導入している。しかし、令和 7 年度のバッジ取得者は修了者全体の約 5%に留まり、昨年度（7%）より更に減少しており、バッジ取得に係る認知・周知の不足が継続的な課題となっている。本学の正課による成績証明となることから、修了者の質を保証し、修了証（バッジ）に対する価値や信用を高める観点からも、プログラムの一層の充実とともに、発行時期の前倒しや就職支援担当とも連携した広報・周知の強化が望まれる。 ● 学生の履修を支える具体的な取組として、LMS を通じた丁寧な情報提供や、授業動画のアーカイブ化・オンデマンド閲覧体制の導入が複数の学部で積極的に進められ、定着しつつある。また、実際の臨床研究における課題例の提示や、他科目と連携した演習の導入など、学習モチベーションを高める実践的な工夫も多くみられる。今後は、修了生に対するアンケートやインタビュー等を行い、プログラムの学修成果を多角的に検証することが望まれる。	A
B：プログラムに対する学生の評価 ・学生の理解度、満足度は十分か ・後輩他への推奨度	● 令和 7 年度学生授業評価アンケートによれば、学部や科目毎にばらつきはあるものの、学生の理解度や満足度に関する設問において全体の約 8 割の回答者がプログラムを肯定的に評価している。 ● 特に医学部「データサイエンス基礎」、国際教養学部「わかりやすい統計」、医療看護学部「情報科学」、保健医療学部「統計学」、医療科学部「情報科学基礎演習」など多くの科目で高い満足度や理解度、前年超えの成果が得られた。一方で課題も顕在化しており、医学部「データサイエンス実践Ⅰ」、医療看護学部「統計学」、医療科学部「情報科学概論」等において肯定的回答の割合の減少や伸び悩みがみられた。学生の苦手意識が強い分野の教育工夫や、受講形態に合わせたきめ細かなサポートが引き続き求められる。後輩他への推奨度は今後のアンケート等で把握に努める。	A
C：プログラムの構成・内容、指導の工夫 ・学ぶ楽しさ、学ぶ意義を教える授業となっているか ・内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業となっているか ・学生の理解やスキルの獲得を助けるための工夫	● 令和 7 年度の学生授業評価アンケートのうち「授業から知的な刺激を受けて、その分野や関連分野のことをもっと知りたいと思ったか」（問 5）という設問では、概ね 8 割弱の回答者がプログラムを肯定的に評価しており、「学ぶ楽しさ」や「学ぶ意義」を伝える授業となっている。一方、一部学部の科目では、肯定的評価が 7 割を下回るケースも見られるが、授業アンケートや報告書からは、内容・水準を維持しつつ、学生の獲得スキルを助ける多様な工夫が随所にみられる。 ● スポーツ健康科学部でのスポーツ関連課題の配慮、国際教養学部での箱根駅伝データの活用、保健医療学部での身近な気象データ利用や臨床研究の課題提示など、学ぶ楽しさや意義を刺激する分野別の好事例が多く報告された。また、座学内に十分な演習時間を確保し、複雑な数式を扱う前に事前説明を行うなど、苦手意識を和らげる指導や、健康データサイエンス学部・医療科学部等を中心に動画教材や e-learning の活用、小テストも導入が進み、理解促進と継続的な学習支援が図られている。 ● また、医学部「データサイエンス基礎」で分かりやすさの評価が大きく向上する等の成果があった反面、保健看護学部や医療看護学部の一部で関連分野への学習意欲の回答が 5~6 割台に留まるなど、意義が伝わりきらない学生への対応が課題である。今後は特定科目のブラッシュアップとともに、全学的な啓発活動の強化が望まれる。	A

D：質問・相談等への対応 ・学生からの質問・相談に対応する体制は確保されているか ・授業課題や学生の参加に対し、効果的なフィードバックを行ったか。	● 令和7年度の学生授業評価アンケートによれば、「質問や意見の述べやすさ」（問10）に関して、回答者の約8割が肯定的に評価しており、質問・相談等への対応に対する体制は概ね高水準で整備されている。 ● スポーツ健康科学部の Google フォームを用いた迅速なアンケート対応や、国際教養学部オンラインでの質問機会提供など優れた運用がみられた。さらに複数の学部での TA・SA の手厚い配置や、医療科学部の基礎学力不足者への個別補習など、組織的フォローも展開されている。一方、オンデマンド講義（医療科学部の一部など）で相談体制の評価が低下したケースや、保健看護学部で「質問の述べやすさ」に約15%の否定的評価が残る課題もある。より質問しやすい環境づくりや、課題フィードバック状況の共有強化を含め、今後も横断的な支援体制を検討していく。	A
E：修了生の進路・評価 ・教育プログラム修了者の進路・活躍状況	● プログラム開始から4年目を迎え、一部の学部において修了した卒業生が初めて輩出され、具体的な進路の把握が始まっている。 ● 医療科学部では昨年度、本プログラムを修了した卒業生160名を輩出し、医療機関や企業、大学院への実績が確認された。また、国際教養学部では2026年3月卒業生の就職内定率が約99%と極めて高く、その内定先に情報通信系（19%）や医療関連（3%）が含まれるなど、得られたリテラシーが幅広く活用されているファクトが得られた。 ● 一方で、薬学部、健康データサイエンス学部など、一部学部では修了生が未だ卒業学年に達していないため判断材料が不足しており、大学全体としては評価材料が未だ発展途上のフェーズにある。 ● 今後はこれら先進事例をモデルとし、キャリア担当との連携や各種アンケート等を通じて全学的な修了生の進路・活躍状況を長期的に把握することを検討する。	F
F：学外からの評価 ・プログラム修了者に対する企業等の評価 ・教育プログラム内容・手法等に関する外部意見	● 令和6年度の9月に本学の外部評価委員会が開催され、数理・データサイエンス・AI教育プログラムの妥当性・有効性、及び実施体制に関する外部有識者からの意見を聴取した。外部評価委員より、“データサイエンス・AI教育は非常に重要なテーマである”との評価が示され、プログラムの点検・評価に関連する課題について質疑応答が行われた。高校段階でのプログラミング教育の環境整備が進む中で、大学入学後の学生間に見られるリテラシーレベルの格差への対応として、初期教育の重要性などについて意見が交わされた。 ● 一方で、各学部固有の企業評価等に関しては、現時点では判断材料の不足や今後の検討事項となっている。 ● 今後、数理・データ科学教育研究センターで企業と連携したセミナー等の企画を検討し、そうした機会を通じて企業から本プログラムの評価を聴取することにも取り組んでいく。	F

【評価の基準】 S：高水準にある/目標以上の成果があった、A：ある程度の水準にある/ある程度の成果があった、B：不十分な水準にある/改善が必要である、F：判断材料の不足により判断できない